

How do you spend your free time? When I'm free, I read books.

I like reading detective stories, especially **ones** written by Agatha Christie.
=detective stories

So, today I'm going to introduce her life story and great **works** to you.
作品

Agatha Christie was born in 1890 in **England**.
イングランド

She didn't go to school because her mother believed that little children should not learn reading and writing.

So she learned to read **by herself**, and she enjoyed reading her father's books.
独力で

She liked making stories and playing with her **imaginary** friends.
想像上の

Actually, she didn't have any friends of the same age, but she enjoyed her **childhood**.
同じ年頃（としごろ）の 子ども時代

She made her debut as a writer in 1920.

She wrote more than 60 detective stories and I've read about 30 of them.

The ABC Murders is my favorite one.
『ABC 殺人事件』

More than 70 years have passed since she wrote it, but it's still very exciting.

I couldn't stop reading until I knew **who the killer was**.
殺人者
 〈who+主語+be 動詞〉～がだれなのか

The biggest **mystery** in Agatha's life is her short **disappearance**.
なぞ、ミステリー 失踪（しっそう）

She left her home on the evening of December 3, 1926, and eleven days later,

she was **found** in a hotel in **Yorkshire**.
find の過去分詞 ヨークシャー

But she never explained the reason for her disappearance.

The famous mystery writer has her own mystery.

I want to write an exciting detective story **someday**.
いつか

あなたはひまな時間をどのように過ごしますか。私は、ひまなときは本を読みます。

私は、探偵小説、特にアガサ・クリスティーによって書かれた小説を読むのが好きです。

だから、今日はみなさんに彼女の人生の物語とすばらしい作品をご紹介しますと思います。

アガサ・クリスティーは 1890 年、イングランドに生まれました。

彼女は、母親が小さい子どもたちは読み書きを習うべきでないと信じていたので、学校には行きませんでした。

だから彼女は独力で読むことを学び、父親の本を読むことを楽しみました。

彼女は、物語をつくり、想像上の友達と遊ぶことを好みました。

実は、彼女には同じ年頃の友達がいませんでしたが、子ども時代を楽しく過ごしました。

彼女は 1920 年に作家としてデビューしました。

彼女は 60 以上の探偵小説を書いており、私はそのうち約 30 冊を読んだことがあります。

『ABC 殺人事件』が私のいちばんのお気に入りです。

彼女がこれを書いてから 70 年以上が経ちましたが、今でもとてもわくわくさせてくれます。

私は、殺人者がだれなのかわかるまで、読むのをやめることができませんでした。

アガサの人生で最大のミステリーは、彼女の短期間の失踪です。

1926 年 12 月 3 日の晩、彼女は家を出ました。そして 11 日後、ヨークシャーのホテルで発見されました。

でも、彼女は決して失踪の理由を説明しませんでした。

有名なミステリー作家に、彼女自身のミステリーあり。

私はいつか、わくわくさせる探偵小説が書きたいです。

When my mother knocked on my door, I was playing a video game in my room.

She opened the door and said, “Jack, what’s going on here?”

You must clean your room right now!”

After picking up all the comic books on the **floor**, I went to the kitchen to drink something.

床

In the kitchen, I found a piece of paper on the table.

It looked like a message from my mother.

It **said**, “I want to say sorry to you. But it was just an **accident**.”

～と書いてあった

事故

I didn’t **mean** to kill Jenny.”

～するつもりだ

I was shocked. Who’s Jenny? What happened?

Mom killed her? What should I do?

Then I took it to my room to think about it carefully.

After reading it again and again on my bed, I decided to call my father in his **office**.

会社

I tried to call him, but my hands were **shaking**, so I couldn’t **dial** the phone.

震（ふる）える

～のダイヤルを回す

At that very moment, my mother knocked on my door again.

“Jack, can I come in?” I was so surprised.

But she said, “I have good news! Guess what?”

She looked very happy. I didn’t know what to say, so I just **shook my head**.

首を横に振（ふ）った

Then, with a big smile, she showed me a newspaper.

She shouted, “I won an award for my **novel**!”

小説

“Your ... novel?” “Yes. I wrote a detective story, and it won a **prize for literature**!”

文学賞

I looked at the newspaper, and found her name and the **title** of the novel.

題名

The title was *Who Killed Jenny*? Suddenly I **understood** everything.

understand の過去形

母がぼくの部屋のドアをノックしたとき、ぼくはテレビゲームをしていた。

母はドアを開けるとこう言った。「ジャック、ここで何が起きているの？

今すぐ部屋をそうじするのよ！」

床の上のマンガ本をすべて片づけたあと、ぼくは何か飲もうとキッチンへ行った。

キッチンで、ぼくはテーブルの上に1枚の紙切れを見つけた。

それは母からのメッセージのようだった。

それにはこう書いてあった。「私はあなたに謝りたい。でも、あれはほんの事故だったのよ。

私はジェニーを殺すつもりなんてなかったの。」

ぼくはショックを受けた。ジェニーってだれだ？ 何が起きたんだ？

母が彼女を殺したんだって？ ぼくは何をすればいい？

それからぼくは、紙切れのことをよく考えてみようとして部屋に持っていった。

ベッドの上で何度も紙切れを読んでから、ぼくは会社にいる父に電話しようと決めた。

ぼくは彼に電話しようとしたんだが、手が震えていて、電話がかかけられなかった。

まさにそのとき、母がまた、ぼくの部屋のドアをノックしたんだ。

「ジャック、入ってもいい？」 ぼくはとても驚いた。

でも彼女は言った。「いいニュースがあるの！ 何だと思う？」

彼女はとてもうれしそうだった。ぼくは何と言えばよいかわからず、ただ首を横に振った。

すると、母はにっこりとほほえみながら、ぼくに新聞を見せてくれた。

彼女は叫んだ。「私、小説で賞をとったのよ！」

「お母さんの…小説？」「そうよ。私が探偵小説を書いて、それが文学賞をとったの！」

ぼくは新聞を見た。そして、彼女の名前とその小説のタイトルを見つけた。

タイトルは『だれがジェニーを殺したのか』だった。突然、ぼくはすべてを理解したんだ。